
里山活動によるちばの森づくり 森のきのこを楽しむ



平成 18 年 2 月

はじめに

ちばの森のほとんどは、人々の暮らしと深く関わり活用されてきた里山です。しかし、最近ではその関わりがしだいに薄れ、人の手が入らなくなったことにより森が変化しつつあります。落葉広葉樹の森は遷移が進み、林床の植生が乏しい常緑広葉樹の森に向かって変わりつつあります。また、管理されなくなった竹林は周囲の森を枯らして勢力を拡大しています。

このような里山の変化により、生活環境の悪化や災害の発生が心配されていますが、その一方では、人と森との新たな関係を求めて住民主体の里山活動による森づくりが県内各地で本格的に始まっています。

千葉県では、これらの活動を支援するため平成15年に「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」を制定し、続いて平成16年には里山の再生などに取組む市民活動の推進母体となる「ちば里山センター」の設立を支援するなど様々な施策を展開してきました。また、同年にはみどり推進課、森林研究センター、社団法人千葉県緑化推進委員会が連携し、里山活動団体を対象とした巡回相談や、里山の森づくりをテーマにした公開講座を開催しました。

巡回相談や公開講座において明らかになったことは、森の見方や森づくりの技術など、里山活動を行う上で必要な情報が少なく、技術的な支援を必要としている活動団体が多いということでした。

里山活動は、谷津田などを含めた様々な里山で行われていますが、このガイドブックは、里山活動に参加される方々にとって楽しみながら森の恵みを活かす知恵や技術を学ぶ一助になることを願ってまとめたものです。人と森との新たな関係を目指すちばの森づくりのためにご活用いただければ幸いです。

目 次

里山活動によるきのこの森づくり —ちば千年の森づくり会の活動から—	2
森づくりときのこの活用	6
1 森ときのこの関係	6
2 県内で発生する野生きのこ	8
3 里山を利用したきのこ栽培	10
4 みんなで楽しむシイタケ栽培	12
(1) なんでシイタケなの？	
(2) シイタケ栽培の要点	
(3) シイタケ原木林の作り方	
千葉県の里山活動に関する問い合わせ先	16



里山活動によるきのこの森づくり

— ちば千年の森づくり会の活動から —

里山活動による森づくりでは、参加者の生きがいや健康づくりを図りながら、森の恵みを活かし、森の持つ役割を維持増進させることを目指しています。また、森の恵みを活かす技術が様々に試みられ、「きのこの森づくり」をテーマに挙げる活動団体も数多くみられます。

そこで、ここでは「ちば千年の森づくり会」のきのこの森づくり活動を紹介します。

活動の概要

ちば千年の森づくり会は、君津市の豊英島で行われた県事業「千年の森づくりワークショップ」（2001年度～2003年度）を契機に活動が始まりました。

活動地は、君津市にある豊英湖に浮かぶ6.5haほどの豊英島です。島は県有地ですが、県と活動協定を結び活動を行っています。

会員は概ね40名で、2ヶ月に定期的活動が1回（参加者11～25名）と、不定期の活動が概ね1回（参加者5～10名）で、現在に至っています。

森づくり活動は、方針を「貴重な動植物の保護」、「二次林の管理と利用」、「森林レクリエーションの場としての管理」に定め、コナラ林やシイ・カシ萌芽林、竹林などを対象に行っています。

コナラ林やシイ・カシ萌芽林などの管理は、場所によって落葉広葉樹の巨木林、コナラ林の更新（再生）、落葉広葉樹の景観林を森づくりの目標としています。巨木林は県内で大径木となる樹種を育成するため、周囲の競合する木を除去しています。コナラ林の更新は20×20m以上の面積を対象に皆伐し、更新させています。景観林は花の咲く木を育て、見通しのよい明るい森づくりを目指しています。

活動の中では、特に、これらの森づくりにより発生する多数の伐採木を、放置せずいかに利用するかが課題となりました。そこで、そのひとつの方法として「きのこ栽培」を試みました。



活動地の豊英島

活動が始まるまで森は放置されていました。2haほどの平坦地のコナラ林にはマダケが侵入し、斜面のシイ・カシ萌芽林は高木林化し始めていました。また、枯れ竹が多数混じったマダケ林が一部にみられました。



ミーティング

会の活動は会員の協議によって決まります。ここでは、会員の様々な経験と能力が活かされます。また、伐採技術や安全作業など知識や技術が不足する部分については研修を行いました。

二次林: 伐採後に種子や切り株から再生した森林

萌芽林: 切り株から出てくる芽（萌芽）が成長してできた森林

更新: 森林を切った後などに次の世代の樹木が育つこと、または育てること

皆伐: 伐採方法のひとつで、立っている木を一度にすべて切ること

きのこ栽培

きのこ栽培の作業は、冬の原木の伐採に始まり、初春の原木の玉切りと駒打ち（植菌）、春の原木の伏せ込みと続きます。

原木に用いる伐採木の種類と量は、活動地のその年の管理状況によって決まります。ここではコナラが大半で、毎年20本前後のコナラを伐採し、きのこ栽培に用いました。これにより、30人程度の活動には十分な量のきのこが収穫できました。

伐採木の樹種によって栽培に適するきのこは異なります。イヌシデにはヒラタケ、サクラ類にはナメコを植菌しました。また、現在の活動の中では、森づくり作業で多数発生するシイ、カシを用いたきのこ栽培が話題になっています。

栽培は一般的な方法を基本としましたが、活動状況や現地に応じた工夫も楽しみのひとつです。切り株を原木に見立てて植菌する方法、栽培に不向きな形や大きさの原木を活用する方法なども試してみました。この他にも、伐採した木を倒した状態のまま原木として用いる方法など、様々な工夫が考えられます。

植菌したきのこの種類は、コナラ原木に実績があるシイタケ、ムキタケ、クリタケ、ヌメリシギタケなどです。



森づくり作業

目標とする森に導く作業は、伐採木の活用を考え、主に冬に行います。また、伐採作業を安全に行うために作業マニュアルを作成しました。



駒打ち作業

作業には小型発電機と電動ドリルを 사용합니다。駒数を半減した経費節減型も試しました。2003年に300本(推定)、2004年に400本、2005年に104本のコナラ原木に駒打ちを行いました。



コナラ切り株への駒打ち作業
試しにナメコを植菌してみました。



伏せ込み作業(ムカデ伏せ)
シイタケ原木はムカデ伏せにしました。他にも現地にそのまま伏せ込む方法を試しています。



伏せ込み作業(覆土伏せ)
ナメコ、クリタケ、ヌメリシギタケなどは覆土伏せにしました。他にも落葉をかける方法を試しています。

原木: 木を伐採して枝を切り払ったもの、ここではきのこ栽培に使う丸太
玉切り: 伐採した木を一定の長さに切りそろえること
植菌(駒打ち): 13ページ参照
伏せ込み: 14ページ参照